

副島賢和

さん

●昭和大学大学院保健医療学研究所准教授
昭和大学附属病院内学級担当

一人じゃない。どんな感情も持つていい。自分は自分のままでいい。生まれてきてよかった。そう思えたら、きつと不安は少なくなる。

「入院中の子どもたちに必要なことは何だと思えますか」と、副島賢和さんは問いかける。東京都の教員として25年間を過ごし、その最後の8年間は昭和大学病院の内学級「さいかち学級」の担任として務めた。教師であり、ホスピタルクラウンだった2009（平成21）年、『赤鼻のセンセイ』というドラマのモデルにもなった。自身も、幼いころ、学校を休むたびにさまざまな思いを抱えていたという。子どもたちへの思い、教育の本質に迫る。

●取材・文……………太田美由紀（ライター）

教育は子どもの発達を保障すること

「僕には今、やりたいことが3つあります。」

1つは、病気の子どもたちに直接関わること。もう1つは、病気の子どもたちにも教育が必要であることや、彼らの学ぶ場所を広げるための啓発活動。そして最後に、後継者を育てることです。

10年前、赤い鼻をつけた院内学級の先生としてドラマのモデルにもなった副島賢和さん。現在は、大学や大学院で、発達心理

学や臨床心理学、病児教育などについての講義を行っている。看護師やPT、OTなど医療関係の学生だけでなく教師を目指す学生にも人気だ。8年間担任をしていた昭和大学病院内「さいかち」学級には、現在も学級心理士スーパーバイザーとして週に一度訪れる。週末には全国を講演で飛び回り、声がかかればクラウン（道化師）として訪問することもある。

「先に挙げたやりたいことなら、声がかかれば何処へでも行きます。結果としてさまざまなことをしているように見えますが、

えるようになったり、体を感じていることを受け取れるようになったりすることが必要だと感じています」

病気になるた自分が悪いと思っていた

副島さん自身も、幼いころに手術や2度の入院を経験した。中学3年生のときには3か月間学校を休んだこともある。

「医療と教育の狭間で抜け落ちていく子どもたちがいます。ベッドで一人でゲームをしたり、ぼーっと過ごしたりする子も多い。ほんの数日のことだと言われることもありますが、たった1日でも、子どもにとって入院は大変なことです。教育は、子どもの発達を保障することです。学習や学びを使い、教師が子どもたちと関わりながら、その子の不安が和らいだり、自分の意見を言

その場にあったスタイルを選んで、必要があればクラウン（道化師）にもなるんです」
院内学級は全国に約200学級。その方針は都道府県によって異なり、東京都などでは院内学級が数か所あるものの、基本的には教師がそれぞれの子どもを訪問する、訪問教育という形式が取られている。入院期間はほとんど短くなり、全国平均で10日程度。入院中に教育を受けるには、院内学級にしても訪問教育にしても手続き上は転校する必要があるため、短期間で転校することに抵抗を感じる人も多い。

「受験生だったので大きな焦りがありました。大人の病棟に入院していたので、同じ部屋のおじいちゃんたちを起こさないように布団をかぶって懐中電灯で受験勉強をしていました」
小学校のころも、体調が悪く学校を休むことが多かった。布団で寝ていると、家の前を通って遠足に行く楽しそうな友達の声がある。運動会の音楽が聞こえてくる。

「何よりもつらかったのは休んでいた期間の友達の会話についていけないことでした。この間こんなことがあって面白かったなど盛り上がっているのを、ふうん、と聞いているしかない。そのときは、病気になるた自分が悪いんだって思っていました」
副島さんは、あのころのことが今の自分につながっているかもしれないと言う。
「あのころの自分に対して、大丈夫だよっ



Profile

●そえじま・まさかず●

1966年福岡県生まれ。都留文科大学卒業。25年間東京都の公立小学校教諭として勤務。99年東京学芸大学大学院にて心理学を学ぶ。2006年より品川区立清水台小学校教諭・昭和大学病院内さいかち学級担任。学校心理士スーパーバイザー。ホスピタル・クラウンとしても活動。09年、ドラマ『赤鼻のセンセイ』のモチーフとなった。2014年より現職。

「言っているのかもしれない」

病院にはさまざまな子どもたちがいる。短期間の入院、障害がある子、慢性の病気で入院を繰り返す子もいる。

「一人一人状況は違いますが、大事にしたところは同じです。どんな感情も持つていい、あなたは一人じゃない、ということその子に伝えるためには何をすればいいかを考えます。そして、3つのステージ、セイフティー（安心と安全）、チャレンジ（選択と挑戦）、ホープ（将来の希望）にその子が進めるように関わります。そうすれば退院後もしっかりと前に進んでいける」

そこで重要になるのは、子どもとの距離だ。副島さんは、実際の距離、心の距離、どちらも相手の表情を見ながらちょうど良い距離をとる。それは、クラウン、心理士としてのスキルと経験から得たものだ。

相手の心の中に存在を置いてくる

クラウンには、短時間で相手との距離を詰めていくためのスキルがあると副島さんは言う。クラウンは常に脇役。出会った人たちが主役になるために自分はどうすればいいかを考えて動く。まずは少しでも心を



著書『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ』（学研）、『心が元気になる学校』（プレジデント社）。院内学級での関わりが詳しく記されている

開いてもらうこと、少なくとも相手と心を開かないように振る舞うことだ。

「実際には、チラッと二度見をしたり、コミカルな動きや表情を使いながら、相手との距離を縮めていきます。最初はクラウンを怖がる子もいますが、怖いと言われたら、『あ、ごめん！』と言って、あなたを傷つけるつもりはないと伝えるんです。相手の感情が動けば、プラスでもマイナスでもいい。そこに付け入る隙があるわけです。ギリギリのラインで少しずつつかいかいを出すことで交流が生まれます。嫌われてもいいから何度でもアプローチします。ちょっと行つて、ちょっと引く。安全な人間だということ伝えていく。相手の心の中に存

「僕は、医療と教育の狭間に落ちてしまった子どもたちを一つの視点として考えているだけです。最近講演や講義などでも、私と病気の子どもたちとの関わりから、聞く人たち自身の子ども、今あなたの目の前にいる子ども、これから出会う子どもたちとの関わり方のヒントを見つけてもらえたらうれしいと伝えるようになりました」

「不安」が人の気持ちを追いついていく

副島さんは、今の社会は「不安」がキーワードだと語る。

「今、多くの人の行動のベースに『不安』があります。自分の中にある不安を解消するために『こうしてはいけない』『こうしなければならぬ』と子どもを追いついてしまふ。自分を追い込むこともあります。すると、子どもも不安でいっぱいになります。不安が多いと悲しみが多くなり、うつ病になることもある」

不安を解消するために必要なことは、自分の不安を語る相手だ。裏返すと、「その子の中にどんな感情が出てきても、その感情をしっかりと受け止めて話を聞くこと」が大事になる。

「自分は一人じゃない。どんな感情も持つていい。自分は自分のままでいい。生まれてきてよかった。そう思えたら、きっと不安は少なくなっていく。そのためにも、助けて行つて行つていい世の中にするのが大事。みんな、助けて行つて行つていいんですよ。だって、みんな大変だもん」

通常級の教員をしていたころは、よかれと思って「自分のことは自分でしよう」と子どもたちに伝えていたが、病気の子どもたちに関わることで、考えが変化してきた。

「自分の得意なことを誰かに渡して、苦手なことを誰かにもらう。そうやってみんな生きていけばいいじゃないかと思うようになりまして。僕が子どもたちに何かを与えるだけじゃなくて、あの子たちも僕にたくさんのことを教えてくれた。そして、僕のしんどさにも支えをくれました」

相手を大切にするためにどうしたらいいかという授業をしたことがある。

「相手を大事にするにはどうしたらいいと思う？」と子どもたちに問いかけると、「自分を大事にできない人が、どうやって相手を大事にするの？」と、5年生の子がつぶやいた。

副島さんは確かにそうだと思った。それ

在を置いてくるんです」

クラウンのアプローチは、保健師のアウトリーチや初めて会う人への対応にも似ているところがありそうだ。

「ちよつかいを出さずにただ待っていてもダメです。ギリギリまで近づいて、来ないでという顔をされたら、ごめんごめんと行って離れます。相手がチラッとこつちを見たら、何か手伝える？と声をかけてちよつと近くに。そうしているうちに、先生来てと言ってもらえるようになります」

初めて会う子や、ベッドから院内学級へ誘うときなどは、さらに配慮が必要だ。病室は逃げ場がない。入口を塞いでしまわないうようにドアから顔だけを出したり、家族や看護師がいるところに行ったり、指人形やペットボトルなどを使って第3者に見立てて話しかけたり、喋らせたすることも

ある。

「クラウンは自分がどんな動きをする人間なのか、自分の中の子どもを見つけていく作業が必要です。同じように、心の部分で自分を見詰め直すのが心理士。どちらもなかなかつらい作業ですよ」

病気の子どもたちとの関わりは、全ての人との関わり方の根幹につながっている。

以来、「まず自分を大事にする」ことの大切さを考え、伝えるようにしている。

「ケアする人のケアも本当に大事です。これを読んでいる保健師さんにも、まず自分を大事にしてほしい。自分を大切にできない人は人を支えることがどこかで難しくなってくる。自分を大事にしてくれる誰かがいることもすごく大事だと思います」

赤い鼻をつけながら副島さんは続けた。

「そして、保健師さんも病気の子どもに出会ったら、病院でも教育を受けることができるって伝えてほしい。分からないことがあれば、ぜひ僕に相談してくださいね」



クラウンの仕草はその人の持っている本来の動きから。自分の性格や行動を客観的に見つめながらアプローチしていく